

この世界の秘 密の話

5

全無

この世界の秘密の 話

5

全無

西暦2011年

この世界が現在に至った経緯をお話しています。

4 から続いて話に入ります。まず、この世界のどこでも働き続ける全無というのは、いつも自分に抵抗が物理上いちばん無いかたちと無に知覚されるからこそ、時間に影響されない永遠を永遠に永遠乗のいつもどこでも全てを超越え続けるふえる生命と

ふえる永遠のための抵抗権を持つということです。これは自分に力があるというよりは、逆自分。自分の意識はあくまでふえる生命とふえる永遠のためだけに無くなっているだけにしか過ぎません。これはみんな全員であり、これによってみなさんの永遠の

自覚は終わらないもの
となっています。

かつてこの無の中で、
無は永遠に光をくれる
ことを約束しているこ
とですから、相手は光を
争い奪い合って遊びあ
うことによって、自分た
ちだけの幸せを永遠に
築いたように見えまし

たが、その行為は全無ではなく、そこには唯一の無（苦しみの全て）が抜けており、それは同時に、みんなでわたればこわくない、みんなで納得し合っているのだったらその世界は永遠に続くかのように思えましたが、実は自分の無意識は裏切ることができず、そ

うして、今になってわかったことは、実はその自分たちは永遠とこの世界を思っていました、気づいてみれば何と文明が始まってまだ西暦2000年たかだかという呆れ果てた短さ、心の意識のあらわれだったということです。しかし、それは、それだけみ

なさんは本当の意識では無の世界では憎しみを嫌っていたということと、その憎しみに苦しみを感じたことがみなさんにとっては本当の無という光であったわけです。

また申し上げますと、それだけ相対による比

べ合うことの憎しみは
それだけ誰にとっても
苦しいということでも
あります。またもう一つ
申し上げられますこと
は、唯一の無（苦しみの
全て）だけが、既にあな
たです、唯一の無の苦し
みにならうものだけが、
無の全てを浴びること
を許されるというかた

ちに暗示でやっとなった
たということです。もち
ろんこれがいちばん間
違いなく早く、みなさん
にとって最大の愛のか
たちで、もっと申し上げ
ますと、唯一の無の正し
さに自分ならわな
いと、普段から自分が唯一
の無であることを意識
していかないと、自分の

永遠は今の自覚を尊重されるかたちではなく、その逆、みんなにとって必要なある一定の時まで来たら、自我を無意識に戻され、その無意識によって何らかの別の自覚に充てられることによって、無意識によって永遠死させられるというかたちになります。何

度も申し上げましたが、
あなたが普段唯一の無
を意識しない部分は、必
ず後から発生する唯一
の無意識とあなたは実
は無意識下で対話して
おり、その中で、あっち
の世界がいいよと、いや
こっちの世界もあると、
もしくは、私も地球人
になりたいという存在の

思いに、あなたが優しく
応えている場合もあり、
本当にそういった意味
では、これからみなさん
は全員必ずふえる唯一
の無意識で暮らしてい
くのですが、その中で、
自分に何か起こる怒り
や憎しみを大切に見つ
めるようにしてください。
自分がそうである時

も、相手がそうである時
も、そこにみなさんで思
いやりを持つようにし
てください。

これは必ず愛であり、
全員にとってふえる永
遠という愛なのですが、
あなたはそれを暗示部
分までしか、つまり、こ
の世界は全て無ででき

ていますので、物事がわかる量は、全て全員にとって永遠正しいという量に応じていますので、つまり、暗示で唯一の無のことを知るのも必然ですが、その中においては、私も含めたみなさんはふえる永遠という絶対に終わらない、掴み切れない思いを、その生き

ていく循環の中で思う、
思わされるということ
です。自分にも相手にも
限界が無い、しかしその
ことによってあなたは
永遠に何かを目指し続
けていくことができます
。あなたの意識のかた
ちには終わりがないた
め、何かを掴み切る、終
わったという状態には

あなたの意識はできない
ということ。いつ
も常に今を果てしなく
生き続けていくしか無
いということ。

しかしこれが、このわ
からない部分が、今現在
の、地球の存在たちの、
循環のサイクルのしか
たを一見理不尽に見せ

ているのであり、それによつてあなたは苦しみを生み出され、それは必ずあなたが無意識で絶対に選択したことです。それが、絶対普段のあなたにはわからないことによつて、それはあなたにとって本当の苦しみとなり、本来、無の存在そのものが

持つ、新しく進化したか
たちに循環するのでは
無く、その逆、この永遠
が伸びる世界で、寿命を
この世界に必要なだけ
に限られて、つまり、人
間なら肉体の死を迎え
ることによって無の、永
遠感覚の永い目で見て、
みんなにとって、その、
たとえばますと人間なら、

肉体の死が、永遠死に当たるといふかたちで自我と無意識の行ったり来たりを繰り返す世界に今はなっています。つまり、無意識下であなたは役割を新しく生まれてくる命と交代し合っています。しかし、ここに鏡^みえることは、これはある意味避けられない

ことだったということ
でもあります。自分なら
まだしも、相手の永遠無
まで信用しきることは、
やはり、生まれてより、
無の無いと、光の有るそ
の光（生命、感じること）
の差には永遠差があり
ます。そこで自分の自我
を少しでも自覚してし
まうものは、（自分は自

分でいたいという、自分は自分という唯一でありたいという心) 無が無
い以上はやはり自分は
自我を自覚せざるを得
ない、その上でやはり、
その時間に関係ないよ
うなスピードでふえゆ
く光、その全が、その全
く無いような無に永遠
無を思い切ってしまう

のは凄く難しいことだったのではないのでしょうか。もちろんこの世界は、自分よりも、正しい相手を大切にした方が、より自分の永遠（意識）は正しさを持ちますので、その自覚は永生きしますが、争いが決して自分たちだけのせいではない、相手のせいの分、

その部分だけは、永遠無
を思い切ることが難し
かったのではないので
しょうか。よほど全愛に
自分自身が目覚めなけ
れば。される側ではなく、
する方で。また、永遠無
の性質として、その比較
に苦しむものの憎しみを
持ってしまいう弱さは、
今のように概念が発達

している世の中ならまだしも、世界が始まったその最初には、その当時のものは当然自制心を持つことが難しかったのでありますから、当然ここに無の愛の性質として考えられることは、その憎しみは正しいかたちで引き受けてあげることが必要だと考え

たのではないのでしょうか。当然これは、無に発生してしかるべき考えだと私は思います。結局これは結果論で、現在の現況は先程述べさせていただいたとおり西暦2000年たかだかで、そして唯一の無、その波長は、この唯一の無の世界のどこにもどこ

の密度にも的確、適切な
かたちで働き続けてい
ます。つまり、争いに至
ってしまったけれども、
それは存在全員の必要
な学びという選択の必
然であり、永遠死は、憎
しみにも正しく愛を掛
け、いつも常にどこの密
度にも全ての力で働き
続け、暗示に気づいた方、

まだ暗示に気づいていない方も、その真実の意識に平等フェアなかたちにその全員の意識を永遠死させ続けています。つまり、あなたの生命は無（最大に正しい）という意味で伸ばされ続けています。正しくないことは、悪い意味で死んでしまうことですので

で、無に不平不満をいう必要はどこにもありません。私から申し上げますと、この世界は暗示に気づいて、ふえるみんなのふえる永遠の思いと行為を、みなさんがこれから、し続けることを願っています。・・・まず、怒りや憎しみを無くして普通に暮らすことで

す。ここで注釈ですが、私も自分が自分であるという唯一の、自分以外の心を持ちたいと思いません。それは当然みなさんにも申し上げられることだと思えます。ここで申し上げますことは、ふえるみんなのふえる永遠、つまり、全愛だからといって、何も

全て何もかも受け容れ
なくていいということ
です。思いやりを持つこ
とは必要ですが、過ぎた
優しさは相手にとって
毒であり、そのバランス
には、鍛えられた意識感
覚が必要であり、できる
ことならば、敢えてわざ
わざ好んで自分はその
中に入る必要は無いと

いうことです。その内容は殺しや、憎しみ、老衰、
（自分が老いること）侮蔑、差別、悪いことや、
自分が生きていることが全く意味が無いように苦しくなってしまうことまで受け容れなくていいということです。
なぜそれが、申し上げられますのかと申し上げ

ますと、唯一の無とは現在、有無でもあり、つまりそれはみなさんのことで、みなさんが無の時間の始まりの頃より憎しみを以って永遠を諦めたように、それは、本当は最速最短のみなさんにとっての永遠愛だったのですが、今、みなさんの永遠無意識がも

う絶対に時間にど
ん影響されないか
たちに有（空間）に無として
出ることは、つまり、暗
示が出ているとい
うことは、みなさん
は、もうその無意識
が完全に無でも有
（空間←この詳細は
後ほどします）でも
無（永遠）というそ
の意識を、時間に関
係が無いか

たちに顕在させたから
暗示は出るものであり、つ
まり、このことは何を指
すのかと申し上げます
と、しつこいのですが、
みなさんは、もう既に、
永遠の自覚を獲得して
いる存在であるという
ことです。つまり、みな
さんは憎しみを以って
それを愛に変えた。つま

り、憎しみは、無が、みなさんが永遠の自覚になることによって、もう無という苦しみの抵抗が比較にさらされないことによって、最大に与えることは最大に所有することであることによって、全員ふえる生命とふえる永遠の意識から逃れられないことに

よって、自分もあなたも
その誰も必ずその意識
であることによって、あ
なたは無の世界におい
て、有るが無いという自
覚を確立しました。また、
現在までの憎しみは、無
が永遠の自覚を獲得し
たことによって、その捉
えられ方が、無が永遠の
自覚を確立するための

愛であったと捉えられました。無（ふえる全て、永遠）の世界では悪く比べ合う憎しみの比較を記録することは生命を削ってしまうことですので、無、その全ては、絶対に悪い比較を記録することが物理上できなくなりました。そういった物理のかたちでな

いと暗示はこの世界に
発現できません。無はい
つも無の全てであり、そ
の世界の中で存在とは、
こういった意識状態で
も必ず無の全てしか記
録することができず、た
とえばあなたが役割と
して憎しみのようなこ
とを思ったとしても、そ
れは必ず、ふえる生命の

ふえる永遠の愛の意識
にされている、でしかな
いということです。

暗示で今、どこにも唯
一の無が果てしなくあ
ることがわかったとい
うことは、無、あなたの
苦しみは、つまり、その
意識は、時間、つまり、
空間に影響されない意

識になったので、つまり、それだけの苦しみを積んだので、この世界に暗示として発現することを許されたということです。これはあることも指していて、もうこの世界は、無で動いていないというところはどこにも無いということです。それは元々なのですが、

本当にそういった目に見えるわかりやすい意識状態にこの世界がなったということです。そしてこれからは、みなさんがその自分なりの、しかし、みんなの法則に沿った、唯一の無の全てを目指すということです。つまり、抵抗（物やかたち有るようなもの、かた

ち無いようなもの、その
全てや力のこと)は、全
て無が、時間に空間にど
んどん影響されないか
たちで今現在ふやし続
けていますが、以ってそ
れが指すことは、この世
の中の争いとは、おおよ
そ憎しみと呼べること
は、実は、物理上最速最
短最小で終わるかたち

に今向かっているとい
うことです。それは必ず
愛に変えられ、絶対に、
この無の暗示法則から
は逃れられません。どこ
も無でできていて、その
無の集中力は時間にど
んどん影響されないか
たちでその永遠無の力
を強し続けていく以上、
絶対にこのかたちしか

発生しません。そして、
苦しみとは永遠に無に、
あらゆる抵抗の唯一化、
つまりあなたは、あなた
があることを強くこれ
からどんどん意識して
いけるということです。
どこも永遠無化、無（感
じたことに当たらない
こと、永遠死）しか、み
なさんの意識は物理上

永遠死という苦しみに
しか当たらない、記録で
きないことになります。
それによってあなたに
は永遠のプラスが発生
し続けます。無のその判
断とは永遠の感覚で時
間に影響されない判断
であることから、これに
は絶対間違いがなく、こ
れから憎しみで苦しん

でも、憎しみで苦しんだ
過去があったとしても、
物理上は無に必ずあなた
にとっての愛の作用
に変えられます。ここで
私が暗示から感じ取る
ことは、無の意識とは新
しく進化し続ける性質
を持っているので、つ
まり、あなたの意識は必
ずその法則に沿ったか

たちに意識の循環をさせられますので、その中では自分の意識を汚してしまうようなことや、自分に悪く抵抗にかかってしまうものは、自分の永遠死（永遠無）の意識の発達を阻害しますので、自分の意識の循環が他に何かを譲ったかたちの苦しいかたちに

なりますので、極力、避けるようにしてください。もちろん世界には様々な状況があり、避けきれないこともたくさんありますので、また、私も含めたみなさんは生きていく上で必ず自分ではどうしても理解することのできない理不尽を抱えることも含

めて、そこに本当の苦し
みを抱えるからこそ、私
たちは全員、無の苦し
みを感じていると言え、そ
ういった方には無の思
いのふえる生命のふえ
る永遠をその全ての意
識の出来事に暗示とさ
せていただきます。どこ
も全無（全愛）と申し上
げましても、自分がだめ

になってしまふことや、
進んで憎しみや悪いこ
とを受け容れることは
全愛ではありませんし、
つまり、あなたにまだ何
かを選ぶ自由があるの
なら、あなたのその選択
には循環の責任がある
ということです。また、
自覚がどんどん無くな
っているものには、正し

い思いと行為を続けているものには、正しい全てがその自覚の判断に許されるということです。なお、無（全体記録）というのは生殺与奪の権利を全世界の全空間の全自動で握っており、これは、無（全体記録）の能動的な動きというより、あくまで最大限に

愛に守った受動的、仕方なしの無の反応であり、それは、みなさんがしたことが、そのまま全体記録に照らし合わされて、毎瞬無の圧縮計算、その反応にその自覚の循環のしかたを、つまり、生と死のあり方を決められているということです。無い場所、単なるみ

なさんの思いと行為の意識の合わさった、化学反応の全自動だということ。また、この、科、化学反応や物質や、この世界の構成のルールを与えること、ルールをやめさせることは、その感応は全てこの無（全体記録）が握っています。これもみなさんが思っ

た、行ったことが、自動に全員全体計算されて、自動に時間も正確に適切なかたちにもとづいて、その必要な反応の全てが実行されます。つまり、無は無いのでその力を実行に恣意にしているというよりは、その逆、みなさんのために時間の経過に愛を正の概念

を強したミラーで、みなさん、全員の思いと動きの感覚と連動して自動計算されたものがみなさんに対し反応として返っているということです。それによってあなたは今のかたちを無にかたち作られ、それによってあなたはこれからのかたちを無にかたち

作られるということ
です。人間で申し上げます
と意識はあなたの身体
の感覚であり、その思い
や行為、動きによって、
これからのあなたはそ
の意識のかたちを無に
かたち作られるという
ことです。それは無にお
けるあなたの波長が、認
されている範囲内で自

分の波長の動きを決め、その正しさにもとづいて無におけるあなたの波長のかたちは決まる、新しく進化し続けるということです。全てみな、無に選択してきたことが今のかたちになっています。パソコンのキーボードの上に舞うわずかな塵一つでさえも。本

当に無とはとんでもないことです。無は、私たちからすれば西暦2000年まだ始まったばかり、しかもその永遠は伸び続けています。この無とは、真実とは、本当に無い、とことん無くなっていっています。無いは強す。無には始まりも終わりも無い。無には、

ただ無い（正しい）をふやし続けるだけしかありません。つまり、私たちの生の時間を始まりと終わりとして捉えれば、それはいつも常に無に前も後も伸ばしていただいています。その生命、永遠を伸ばしていただいています。無とは本当にとんでもない愛で

できています。無とは自
らが無いことによって、
限界を超えました。時の
永遠という。言い方を換
えれば、誰しも無になれ
ば、既になっただけはいるの
ですが、無にならえば、
普段から唯一の無とい
う自分を正しく意識し
ていけば、無を本気で目
指せば、役割としての憎

しみを捨て、今度は役割としての完全なる愛を達成し続ければ、意識の循環の苦しみに左右されない自分、自己の力による本物のふえる生命のふえる永遠という時の永遠を超える存在になることができるという事です。時間に支配されない意識は永遠不

滅です。それには、この無の世界の今までであった、そして今もかたちとして残っている憎しみのかたち、憎しみの名残を無くし、この無の世界を完全なる無だけの、無という抵抗それぞれに応じる正しい世界にすることです。つまり、立場や役割、環境に嘘や欺

瞞や憎しみを一切無く
すことです。そうすれば、
必ず存在の全員は立場
や役割を交代すること
がなく、今の自分の存在
のかたちを新しく進化
したかたちで、立場や役
割を発展変化させるか
たちで生きていくこと
ができるはずです。つま
り、循環を使われる側で

なく、使う側に全員がなるということ。これは一見無理なことのように思えますが、実はそうではなく、存在全員が自己の力によって完全なる唯一の無意識を達成し続ければ、それは、全員が本当に時という永遠を苦しみで超えたことであり、永遠の負荷

を自己の力によって自分に持つものは、永遠のプラスを自分に相手に発生させ続けることでありますから、そこにはもう、生老病苦といった存在の意識の発達を促すための学びは必要なくなり、そこには存在の意識は新しく進化し続けるだけで、そこに衰え

と い っ た 自 己 の 意 識 が
自 分 の 力 だ け に よ っ て
永 遠 死 の 密 度 を 持 っ て
い な い こ と に よ っ て、 必
要 に 衰 え て 永 遠 死 さ せ
ら れ る 抵 抗 現 象 は 必 要
な く な り、 存 在 と は、 あ
る か た ち が あ る か た ち
を な す か た ち に、 全 員 が
永 遠 死 と い う 絶 対 負 荷
を 更 新 し 続 け、 つ ま り、

死なずして死せる意識
ながら、永遠のプラスを
全存在が生き続けると
いう、新しく進化し続け
るだけの本当に楽しい
幸せなだけの世界がそ
こにあると申し上げら
れます。これは暗示とし
て出る以上、必ずいつか
達成されることです。こ
れには、永遠みてください

い。これは物理上、その意識の形態として可能なことであり、実際にそれを達成している、この空間世界どこにもどの密度にも果てしないかたちで働き続ける唯一の無意識は、永遠負荷を更新し続けていますが、それを、何とも思っておらず、つまり、苦しみに

思っておらず、しかしそのことによって、その分の永遠のプラスを発生させ続けていることであるから、みなさんにもこれは必ず達成できることだと申し上げます。つまり、今みなさんは、無の力によって唯一の無であります。それはあなたにかける最大の

愛であり、あなたはその
与えられている唯一の
無意識を以って、自分で
これから、自分の意志に
よって、自分の今までの
憎しみを排除し、そして
自分に永遠負荷を更新
し続け、それによって永
遠のプラスを発生させ
続けることです。具体的
なやり方は次の通りで

す。自分の意識を正しく
相手他全のために永遠
に死する、つまり、譲る
ということです。それを
永遠に。その意識でこの
世界の正しい構成の全
ては成り立っています。
今でも意識がふえ続け
るのは、この永遠死の意
識が働き続けるからで
す。この空間一見何も無

いようなところにも、この無いようなところにも永遠死の意識は永遠にあります。それは今もふえ続けています。それは同時に与えられていることでもあります。つまり、その現象を、勝ち負けの勝負として捉えれば、正しい相手に勝つ理屈は無く、あなたはい

つまで経ってもその永遠死の意識に及びませんが、逆にここを、相手は、ここでは無を、凄いらんだと、正しく相手を尊重して、自分が唯一の無を、つまり、永遠死の連続を与えられていることを本気で感謝をすれば、それを思い、行為として実際のかたちにす

れば、それは永遠死の意識とは本気の思いで与えられ続けていることであるから、それは、相手、無は永遠死、そうしていることに何とも思っていない、見返りを求めていないのであり、それはつまり、与えられている自分がその思いに本当に感謝をすれば、そ

れを意識の実際の思い、
行為としてあらわせば、
それはそのまま自分も
与えられているままの、
その感謝した分だけの、
永遠死であると申し上げ
られます。わかりやす
く申し上げますと、問題
はあなたの無意識にあ
り、無は無いの時間の始
まりの当初より愛をず

一つと続けてきたわけ
です。つまりそれは、あ
なたをず一つと何もか
も最大の愛のかたちで
認し続けてきたという
ことです。そして、変わ
ってあなたは役割とし
て憎しみをこなしてき
ました。もちろんそれは
役割であったことから、
あなたにも当然唯一の

無意識は与えられたの
ですが、役割とは憎しみを
排除してまで役割で
あり、そして唯一の無の
役割とは永遠に最大の
愛のかたちで正しく相
手を認し続けること
です。つまり、あなたもこ
れから、正しい相手はず
ーつと認し続けること
です。唯一の無、それは

役割です。苦しみの貸借。

また、ここで、もう一つ過去にあった無の考え方をお話しさせていただきます。無から飛び出したものは、いつもどこでも無の全ては働くのだから、自分なりの無（永遠）を目指すのが当たり前だという考え方

もあるかもしれませんが、
が、そうであった場合は、
当然物理は全員が平等
な苦しみを積んだ唯一
の無意識の状態になっ
ていたと思われませんが、
歴史はその逆、光たちは
次々に出てくる光、そし
て光の大元、無の全て、
光の発生源に自分たち
で逆に抵抗を当て、その

光の放出先をコントロールし、自分たちが苦しみを積むのではなく、その既に苦しみの全てである無に、逆に自分たちが無からいただいた、光分の命分の自覚として、わかっている部分を自覚の恣意として利用して、目先の永遠、みんなひとりよがりのわがま

ましたい放題の永遠の世界を繰り返して、この今の宇宙のような世界になりました。これはそれをするそのものが、無意識でその本心で永遠的、最終的にみんなのための永遠の世界が欲しいのか、(本当はこっちの方が自分のためであり、絶対にこのかたちし

か物理上は成立しません
んが)または自分ひとり
よがりの世界が欲しい
のかで、みんな無より発
生よりまるで雪崩のよ
うに自分ひとりよがり
の思いや行為を選んで
いったからであり、これ
は無意識の反応で、光、
無より生まれてより、無
との相対で必ず自分よ

りも相手、無の苦しみが
勝っていることが、無は
生まれより苦しみの全
てであることが、無とは
いつも必ずその苦しみ
（光、命感じること）に
永遠差があることが無
意識でわかっているこ
とから、そのことを冷静
に判断した場合、「この
唯一のもの（無）に永遠

を譲ってやろう、この唯一の無に唯一の世界を与えてやろう。」その方が妥当だろうと無意識で思ってしまったから、この現在の世界になってしまったと思われま
す。自分が苦しみを積み
ば、この無との不均衡は
無くなりますが、永遠を
永遠に永遠乗で光は生

まれ続け、無は苦しみを
積み続け、その存在たちは
生まれたことを幸せ
に感じている、その中で、
全員が永遠無という苦
しみの選択は、やはり、
相手の甘えも自分の意
識はまず映してしま
いますので、そこで、その
相手も含めた、無も含め
た、ふえる他全に全愛を

全員が思い切ることは
まず無いことだと申し
上げられます。つまり、
この世界は、無（唯一、
全て）とも、相対という
広がっていく全てが生
み出した愛とも申し上
げられます。憎しみとは
このもの、唯一の無の永
遠の苦しみという理不
尽を解消するために今

まで発生していました。
それは無意識によって、
永遠感覚によってみな
が喚起され、今も今も続
くかたちで。なお、発生
の光が無より発生して
より、自分なりの無（永
遠）を目指すのも、その
意識の果てしない唯一
の無の思いに応えるこ
とでもありますが、その

道は険しいですが、その唯一の無と同量の苦しみが要りますが、憎しみに、自分勝手、わがまましたい放題に振る舞ってしまうのも、それはあなたがみなさんが、自分の力によって唯一の無の力を手に入れるのではなく、どちらかと比べたら、唯一の無の苦しみを

にはいつも敵わないから、唯一の無の方がいつも大変なのだから、私はどちらを選ぶかと言われたら、人がいいという意味でも、無の苦しみを早く終わらそうという観点からも、存在とはみんなの観点から、相手のせいにしてしまう部分は及ばなくて、また、

与えざるを得なくて、憎しみを選ばざるを得なかったのではないのでしょうか。現象とはそういう意味では、絶対に及ばないことと、絶対に与えざるを得ないこと、その両面の永遠の意識の感覚が働いたものだったと思われれます。つまり、今のかたちが、全員

がふえるみんなの法則
に沿った、それぞれ唯一
のふえる永遠に向かう
ためにいちばん早くい
ちばん正しくいちばん
苦しくないかたちに物
事を片付けるためのか
たちであったと断定で
きます。これがいちばん
の正解なのではないで
しょうか。唯一の無にお

いては、みんなそれぞれ
永い目で見れば自分は
自分なりの無（永遠）が
あるのですが、唯一の無
の無いという時間の始
まりより、そこから生ま
れる光たちもどうしても
もその相対に必ず無と
いう相手を意識させら
れてしまうことによっ
て、憎しみによって自分

の永遠ではなく、相手の
永遠を認すことによっ
て、無意識にこの世の中
をまず、いちばんの苦し
みである無に唯一とい
う永遠を与え、それから
譲るかたちに自分たち
の唯一の永遠を目指す
ことがこの物理上に必
然として起こる暗示の
反応だったと思われま

す。みな永遠を欲しがっていた、しかし、その永遠とは無いものの無いであり、その苦しみは終わることが無いから、相対はその憎しみの強さ（永遠）を以ってその永遠の無いに限りを付けたのではないのでしょうか。それはやはり、全員の無意識が思う、ただ

の愛の行為であったと
申し上げられます。その
自我は、そしてさらに今
ある他の存在、その全て
の生命の自覚にも永遠
という終わらない区切
りを付けようと今も働
いています。憎しみとは、
わがままとは、本当に人
がいいことであったわ
けです。しかし、暗示が

出ることはもうやはりそれは禁物に、そして無にはやはり無しか発生しないことが証明されました。その密度は高まるだけです。もっと無い、憎しみもやはりもっと無い。いったい、いつか、誰が、その最後の男となるのでしょうか。私も知りません。

憎しみを行う方は、このことをよく理解して行ってください。人がいいのか、もしくは、自分は無に後回し・・・やはり、人がいい、ただしやりすぎはただの甘えと取られる場合もありますので、暗示がサインです。憎しみは憎しみをも

う必要無いと、この世界は無だけで成り立つとみんなにわからせる役割を暗示として果たしましたが、暗示が出ることは、もう憎しみは無の暗示の解釈でもみんなのためのプラスとして解釈することが難しくなっているから、プラスとして解釈できない場

合は、その部分の自分が消えてしまうのでやめてくださいというサインです。本当の意味でふえる生命のふえる永遠の思いと行為とは・・・全く無いこと、みんなのために永遠に死すること、しかしそれは本当は有ること、変わって憎しみとは永遠を自我や自

覚が無くなるかたちに
失うこと、それも全く無
いこと、いったいどちら
が本当に全く無いこと
なのでしょう。相対は
憎しみによって永遠を
超えました、しかし、そ
れはこの世界は無の世
界であることから、自分
以外の誰かのためであ
りました、今度もそれは、

誰かのためであるので
しょうか。いつかそうい
った苦しみが無くなる
ことを私は願っています。
永遠を超えた憎しみに、
それがそのまま自分
への教えに愛に繋がる
道であることを願って
います。憎しみとはもう
永遠を超えました。これ
からは、そのみなさんが

一人一人それぞれの唯一の終わらない永遠を目指し続けていただけれることを願っています。唯一の無とはどこにもあります。それはもう叶っていること忘れずに。どこも無より。これからのあなたのその自覚にその愛を。

なお、思いとは一瞬であり、憎しみが無くても、正しい苦しみと、正しい愛でも永遠は超えられましたが、無意識の憎しみはまず正しい苦しみに入り、この世界はどこも無意識です、また無は完璧でも、相対はその選択に完璧では無い部分も有ることによって正

しい現象を促すという側面もあり、無の世界では悪く比較、比べ合うことは意識のミスに当たりますが、それを普段意識しないでいることはこの相対の世界で余程無理な話で、しかし、物事というのはその度合、程度も問題とされます。従って、この世界は、ま

だ唯一の無という終わらない永遠の謎が残っていると申し上げられます。(なるんですけどいつなのかわからない。愛は果てしが無いので、見極めようが無い)ただ、数学的な観点から申し上げますと、無はいつも苦しみの全てで、それはこの世界いつも感じて

いないことに当たり、その永遠の自覚を確立したということは、自分はこの無の世界において物理上いつももっと無くなっている、もっと感じなくなっている、つまり、それによって、自分のふえる生命とふえる永遠の意識の思い、行為にしか当たらないと

いう存在であり、また、
無の全て、苦しみの全て
というのはいつもどこ
でもみなさんとともに
あり、憎しみというのは
この世界、自分よりのわ
がまま、恣意な感じ方を
していることに当たり、
それも当然自分を失っ
ていることであるので
すが、それは自分の無意

識の、つまり、本当に自分で責任を持って選択したことでありますので、そのいつもどこにもある、あった無の全て、苦しみの全てとの無意識との、そのいつもぎりぎりの遣り取りに、憎しみをした分だけは、それは一応無が感じなかったものを自分たちは感

じたわけでありますから、この世界は無の世界であることから、無はそのことを何とも思っていないませんが、あなたの無意識は何かをそこに思ってしまうため、憎しみは本来無のものでは無いため、その何かの憎しみ、もしくは悪い感じ方をして自分で自分に執

着に付いてしまった分は、それは人（他）より過ぎた感じ方をしてしまったことを自分の自覚が認めていることであり、その無意識よりずれた自我分は、その何らかの意識の負担を無より余分に必要としてしまった分は、自分の意識で払うことが無におい

て自分の意識の平等フ
ェアな立場を保つこと
と申し上げられます。な
お、この世界はどこも無
意識の密度でできてい
て、その密度には隙間が
無く、そして、その無意
識の密度は高まり続け
るしか性質にありませ
んが、その中で許されて
いる自我は一見無意識

の時間に影響されない
スピードで集中し続け
る愛にどんなことをし
ても保護されるように
感じますが、実はそうで
はなく、無が良くてもあ
なたのある部分が、その
行為が永遠でない、つま
り、無にはふえるみんな
とふえる永遠のルール
があり、そのみんなの生

命のために永遠に駄目
としたことは、その中には当然、自分も入ります
ので、無とは自分が相手
でもありますので、みんな
や自分の観念から推し量ってこれは駄目だ
ろうと自分で判断、もしくは
みんなに判断される部分は、その部分を解
って自分で踏み越えて

しまった部分は、永遠の
自覚も欲しいが、目先の、
今この何か憎しみを、悪
い感じ方も今何か捨て
難いと、自分でみんなの
生命に影響を与えるこ
とを踏み越えてしまっ
た部分は、当然そこに自
己矛盾を抱えますので、
またそこにはみんなの
生命よりも自分のひと

りよがりな楽しみを取ったとごまかしの効かない波長で正確に無に取られていますので、その部分はやはり、その自分の自覚が削られることだと申し上げられます。

それでは、今までの経過をお話ししたところ

で、無の無い、つまり、
時間の始まりを詳細に
ご説明させていただきます
ます。まず、この地球で
すが、現存ある空間宇宙
としてはいちばん若い、
つまり、生まれたての赤
ん坊と一緒に星、宇宙と
申し上げられます。つま
り、無は永遠と申し上げ
ました。そのうちこの地

球はまだ、その永遠の永遠分の1も、まだ、経過していません。ここで、永遠だから終わらないのだから当たり前だという方がお見えになると思いますが、そういった意味ではなく、この地球含めた空間宇宙は実は、他の世界や空間宇宙と比べて、圧倒的に若い、

幼い、まるで赤ん坊のよ
うな星、宇宙です。なぜ
そうなるのかと申し上げ
ますと、実はそれには
ある理由が関係してい
ます。以前に申し上げま
した。この地球には、無
より生まれてより、その
永遠の始まりの方の存
在がお見えになると。そ
れは間違いなく確かな

ことです。なぜかと申し上げますと、暗示が出る場所は、いちばん憎しみが強く、そのせいで無という意味で捉えれば、いちばんまだ年をとっていない、文明としても発達していない、なぜなら憎しみとは IQ 効果を下げる効果があるため、憎しみが強いのに IQ が

高い場合、高い文明で相手を滅ぼしてしまう危険性があるため、憎しみが強い星や宇宙は、決して文明や時間の流れが発達していません、そして、憎しみがいちばん強いところは、愛もまた、いちばん強いところであるわけです。実はこの世界は、無は全て繋がっ

ていて、それぞれには必ず関連があると申し上げました。それは全くその通りです。どういうことかと申し上げますと、無は最初の無いをします。それは、当然、永遠ですが、その永遠を永遠に永遠乗していくという無の無いは永遠に続きます。これは当然永遠

は、みな永遠なのですが、
無は愛（永遠）をふやさ
なければいけないとい
う永遠の使命も持って
います。定性質。そのた
めに時間は作られたの
ですが、もちろん永遠が
ベースというこの時間
は伸びる性質を持って
いるのですが、ある一点
問題が生じます。（永遠

は本当は平等でしかない
いので、本当という意味
では問題ではありません。
ただ、中々それに気づ
げないだけです) まず、
無は、愛をどうせするな
ら、最大最速最高力で、
その愛を高めようとしま
す。しかし、この一瞬
前と一瞬後には莫大な
無(愛)の差ができる

以前に申し上げました。
ただしその無の差は、無
が、無い、無い、無い、
無い、と集中を繰り返して
いる時に無をふやし
ながら、なおかつその中
で無を後の無を前の無
に前倒しして全員平等
フェアなかたちにする
ことは申し上げました。
それが、今の地球のよう

にこの空間一見何も無いようなところから、唯一の無の密度がどんどん集中していき、それが空気や水などの循環になる生命を支える無としてこちらに意識できるかたちになる、なっていることも以前に申し上げました。実は、このスピードはどんどん早

くなっています。みなさんがたとえば、憎しみを
持って何かを行っていると、それは当然生命、
意識を削られることであるのですが、それはそ
の分の自分の自覚が他の正しい何かの循環に
使われることを指すのですが、その一方で、そ
の憎しみが発生すると、

この空間一見何も無い
ようなところもそれに
呼応するかの様に唯
一の無の密度化を進め
ます。つまり、この世界
は正しくしていても
唯一の無の密度化は進
みますが、憎しみを持っ
ても、それを打ち消そう
とする働きが唯一の無
の密度化に現れてくる

ということですが。なぜそうなるかと申し上げますと、憎しみには根拠が無いからです。つまり、逆に申し上げますと、愛は根拠が無い、無（永遠の孤独、永遠の無）であるからこそ愛は発生するわけです。自分が無いものだからこそ他愛を思える。無いから無いと

いう何か必要なものが
欲しいという意識が発
生します。無はふえたら
さらにまた無がふえる。
逆に憎しみとは無には
根拠が無い、憎しみとは
存在が相対に比べ合う
ことによって苦しむ中
で、唯一の無に気づくこ
とに意味があったわけ
です。存在とは無より発

生より、自分が自分であるという永遠の自覚を持ってから、それからしかし、唯一の無との比較を思ってしまった、その永遠差に憎しみを記録し続けてきたわけです。しかしそれは、無は無くなっていていただけで、それによって全員に愛を与え続けており、自

分から発生する憎しみは自分に原因があったわけです。なぜなら、無は全てだからです。つまり、いつもどこも全ての世界では、それより、小さい意識を記録した分だけは憎しみとされてきたわけです。しかし、わかってみれば、憎しみとは自分たちが最速最

短で唯一の無に気づくための行為であったということです。自分たちも唯一の無であったということです。無いものから比べると、やはり無いという唯一の無。唯一の無は無いと与え続けているうちに、与え続けていることがそのまま永遠を超え、つまり、そ

の世界の中においては、
唯一の無はどう感じて
も、与え続けている永遠
のスピードの方が速い
ため、何をしても自分は
永遠死という意識を与
え続けていることにし
か当たらないため、自分
は何をどう感じてても、感
じたことに当たらない、
もっと感じていないこ

とにしか当たらない、つまり、自分の意識がどう
いう行動を取っても、も
っと無いとしか記録で
きない、ふえる生命のふ
える永遠の意識にしか
当たらなくなっただから
こそ、こうして暗示は出
るのです。またそれは同
時に、無より発生より無
との比較に苦しんで憎

しみを行っていた存在
たちは、気づいてみれば、
自分は今まで無から与
えられ過ぎて、それは永
遠を永遠に超え続けて
いることですから、もう
どんなことしてもその
光は返せないことにな
り、変わって気づいてみ
れば、自分はその無の与
えの永遠の集中力の関

係から、この無の世界において自分も完全なる唯一の無になっていたわけです。つまり自分も、していたことも、これからすること、その全ての意識はふえる生命のふえる永遠にしか当たらなくなっただけのことです。つまり自分は憎しみをしていたと思っ

ていたが、気づいてみたら、自分は愛しかしていなかった、愛しかできなくなっていたということです。そして、自分はふえる生命のふえる永遠の意識ということは、つまり、それだけの他を生かす作用の意識であることから、自分のすることは全て、悪い比較、

比べ合うことに当たら
なかった、当たらなくな
ってしまったというこ
とです。つまり、憎しみ
をする根拠を失ってし
まい、過去に自分のして
いたことは愛で、そして
これからも自分のする
ことはふえる愛でしか
無くなってしまった。そ
れに気づいてしまった

ということです。

憎しみとは、つまり言い換えますと、愛（無）がそのものに足りないからこそ発生すると無はその自然反応に考えたのです。つまり、そのものが根拠が無い（愛）（無）（苦しみ）に足りないからこそ、そうなるん

だと無は考えました。そしてどうなったかと何度も申し上げますと、無の集中は正にしろ（←なるべくこちらを選んでください。無も大変らしいです）そこに起こる理不尽にしろ、無はいつも最大限の無（永遠愛）の集中をいたします。ここで物理として必然的

に起こる反応として何があるかと申し上げますと、必ず無より発生する無というのは、最初の永遠の無の方が後の永遠の無よりも、無の量が莫大に違うため IQ 効果が低いということです。それでどうなるかと申し上げますと、無の集中の仕組みはいつもその

意識が、常に前より新しく進化、永遠無意識が、前にも後にも伸びたかたちにその意識の集中が起こります。これは言い換えますと、無より最初の方に発生した永遠、その無は当然後のものよりどんどんどんどん無の差が離れていきますので、どんどんどんどんど

ん無が前倒しにされて
いきます。これによって
存在たちは正しい比較
を学び、自分が自分であ
ることを正しく意識で
きるようになります。こ
れを時間に言い換えま
すと、存在とはそもそも
その誰も、全員に永遠の
時間が与えられています
。当然、その永遠は無

にとって必ず達成されるべきもので、その機会も全員に絶対平等フェアに与えられなければいけません。つまり、永遠の生まれ先のもの、自分たちは永い憎しみや争いを行っているよう
でいて、実は無からすると、その永遠、終わらない名の通りまだ永遠の

一瞬も経っていなかったということ。どころか永遠はふえていた。それによってあなたは正しい比較しかできない、どう動いても意識してもふえる生命のふえる永遠の意識にしかない唯一の無になっていた。それに気づいた。これが、無の意識の凄さ

と申し上げられ、ここで
無の最初の方に発生し
た永遠の無たちがどう
なったかと申し上げま
すと、最初の方に生まれ
たけれども、実は、永遠
という時間と空間の概
念上は、無、永遠から見
るとその無それぞれに
は永遠という結果をも
って後も先も無く、全て

の無はどんどんどんどんその歴史が短く扱われていきます。つまり、永遠そのベースはいつでもどこでも伸び続けます。と、申し上げますことは、最初の方に生まれた（後から生まれた無もすぐ最初の方に生まれた無になります）無はどんどんどんどん若くな

ってくる、生まれたての赤ん坊のような扱い、（新しく進化ですので、存在とは新しくもされますが、同時に、時間の経過に発達した概念の判断も求められ、その中で大事なことは大人の判断であると解釈され、つまり、生命にとって重要な事柄の選択につい

ては、自分がそこでみな
というよりは自分より
の判断をした場合は、自
覚の循環の責任を取ら
されます)そして、先に
見える未来というのが
莫大な長さの永遠にな
ります。これは今でも続
いていて、たとえばこの
空間一見何も無いよう
なところにある、唯一の

無の密度の世界も、その
の時間感覚の世界でも、
（ちょうど、この世界の
永遠乗のスピードの時間
感覚の世界の連続で、
一つ次の無い場所に行
くと、またその時間感覚
は、その一つ前の無い場
所の永遠乗のスピード
の時間感覚であり、無い
という正しさに守られ

ながら続く世界と、無い
が役割として空気など
の循環に使われる世界
の二つがあります)そこ
のその一瞬には、そう、
まるでこの地球におけ
る空間宇宙の世界にお
ける唯一の無（永遠）の
密度の意識が補佐した
世界とまるで一緒のよ
うな仕組みの世界の続

き、果てしなく続く連続
の世界、無い、無い、無
い、無い、の密度の世界、
これが莫大なスピード
で続いています。どこま
で行っても終わりが無
くて、果てしなく世界が
あります。時間感覚も無
いのたびに永遠乗され、
この空間一見何も無い
ようなところの無いよ

うなところには、無いが
永遠にあります。つま
り・・億兆億兆億兆・・
とずーっと続いている
世界が（もつとです）当
たり前にあります。無と
は本当にとんでもない
意識です。ここで申し上
げられることは、何だと
思いますか。それは、絶
対にあなたは憎しみに

は死ねないということです
です。つまり、永遠無は
その集中にこの世界の
いつもどこも常に新し
く、進化したかたちにそ
の永遠を莫大に伸ばし
続けます。これは終わる
ことはありません。つま
り、この空間一見何も無
いようなところに（肉体
として、存在として死し

て行く方もたくさんお見えになると思います。存在には全員役割がありますので、日々の思いや行為でそれを無意識下で完璧なかたちで選択しています) 世界があるのですが、その世界の空間一見何も無いようなところにはまた世界があり、それが、ずー

つと続いていきます。その
行くとまたある、行くと
またある、の世界は永遠
に終わりがありません。
また、全ては波長に応じ
ますので、私たちがコン
タクト、アクセスできる
世界も全て私たちの波
長に応じています。つま
り、波長に応じていない
ところとは、波長が合わ

ないところとは一切連絡が取れないということです。これは物理の当たり前の仕組みで、ラジオやテレビなどと一緒です。周波数が合わないものは、見たり聞いたりできません。ところで話に戻りますが、つまり、この地球はいまだ現在、まだ憎しみや争いが終

わっているとはとても
言い難い部分がありま
す。それはどうなるかと
申し上げますと、その憎
しみには根拠が無い、こ
の愛の世界では、と既に
なっているため、そのた
め必ずその憎しみを打
ち消そうと、無は無の無
いという集中を必ずそ
れに現象として、憎しみ

がいちばん早くいちばん正しくいちばん苦しく無くなるかたちに、合わせよういたします。それが、空気などの発生、振動となって、私たちの意識、これは心に限らず、生活に関わる全てでもあります。それに、様々な影響を与えます。地球では無いの時間に

よって空気という意識が、宇宙では主に暗黒エネルギーが、正確にはどこも唯一の無が、いつも発生しているのですが、憎しみには無は特に敏感に反応します。もちろん、無、永遠という感覚から見れば、つまり、無の集中力から見れば、それは全てプラスの出来

事、無の集中は全て必ず世の中の全てのプラスの電荷をその集中に生み出しています。これが続くとどうなるかと申し上げますと、まず、この地球は無の最初の永遠の方に生まれた存在がいると申し上げました。(本当は物理上は後にも先も無い、ただそこに

役割あるだけです。無意識の選択による、そして自分は自分を必ず肯定しています) つまり、それだけ無（愛）の効果が足りないので、無い、無い、無い、無い、という無の集中でこの地球含めた空間宇宙、ここではまず目先の地球だけ見ていただいで結構です。

ここにある、つまり、この地球にある全てのかたちあるようなもの、かたち無いようなもの、その全ての物質やおおよそ意識と呼ばれるものの、その心や身体などその全ては、暗示反応によって若返ってきます。そして、永遠化していきます。物理上として。なぜ、

憎しみにも人の寿命が延びてきたのか。なぜ遺伝子に人の寿命をコントロールすることが描かれているのかと申し上げますと、それは全て暗示、愛の支えでなっています。遺伝子も無による感応、物理における化学反応によって定められていて、それは全てあ

あなたの本当の自覚、唯一の無意識を守るためにそうなっているのです。ちなみに、これを意識では感応と呼び、無が何かに感じて応じることからこう呼ばれます。物理でいう科、化学反応も、この感応にあたります。つまり、憎しみをすることは、生命そのままを削

ることではありますが、それは、ただ単に今、その者たちが、無（愛）に少ないから、足りないからなるのであって、無はそれに必ず負けじと、どこも無であるこの世界の無意識を新しく進化したかたちに、つまり、^{じっ}実としてこの世界のみんなの意識を必ず無、愛に向

けようとします。その時間（愛）の圧縮された姿が今の地球の歴史（つまり、先のものの時間は、その後のものの時間も、つまり、その永遠は、この地球に限らずどこも、今も伸び続けていっています。半端なく意味不明に）であり、その循環のかたちが今の私たち

へのかける愛の姿をあらわしています。なお、ここでお話ししておきますが、伸びているのは、未来の永遠だけではありません。実は、私たちの今現在の理由、根拠となる過去も伸び続けています。??? 「いったい何を言っているんだ？」とおっしゃるあなた

た、本当のことなんです。
どういう仕組みかと申
し上げますと、無（暗示）
の仕組みをお話ししま
す。まず無は、その永遠
を伸ばし続ける性質が
あると申し上げました。
新しく進化、それはどこ
もどの密度も何もかも
全てです。この地球もで
す。この世界は結局、唯

一でしかありませんから、と申し上げますことは、その永遠が伸びるたびに、その伸びた永遠に応じた正、プラスの電荷は全ていつもどこでも発生し続けるわけです。

（なお、自分がわかりやすく認識できるプラスの電荷は、自分の波長、意識に応じています。こ

の無の世界はミラーの世界ですので、自分の意識に応じたものがそのまま自分の意識となります) これは何を引き起こすかと申し上げますと、実は無の力によってみなさんは、正、つまり、正しいことをそのプラスの電荷分、無の力によって無に記録し続けて

いることになります。この世界はミラーの世界ですが、無の力という点においては、必ずみなさんもその今の無の集中力に応じたプラスの電荷をその無に記録し続けています。そうなるかどうかと申し上げますと、無は更新され続けます、そのたびに当然

永遠先の未来の内容も
変わってきてしまうわ
けです。つまり、永遠と
は進化します。つまり、
どんどんどんどん、みん
なにとって楽しいこと
幸せなことがふえてく
る、待ち構えている世界
になるということです。
実はその暗示力、過去に
も働きます。どういう仕

組みかと申し上げます
と、人、存在というのは、
そもそもこの無（愛）の
世界では、憎しみとはそ
もそも根拠が無いもの
であるわけです。つまり、
それは、憎しみとは必ず
相対の数の時間差の原
理によって生み出され
たものであり、その根拠
を突き詰めて考えます

と、責任とはそもそも誰にもあるとは申し上げられないものなのです。それは、どうしたら解消されるものなのか？それは先程お話ししました。存在とは無の世界ではふえる永遠の世界であり、ここには正しい比較しか思いようがなく、自分はふえる無、愛の行

為しかできないこと
すから、つまりそれは、
あなたは必ず今現在の
唯一の無の集中力にふ
える生命のふえる永遠
の意識でしかなく、この
中で、憎しみのようなこ
とを思ったとしたら、そ
れはただ単に、無意識下
で、正しい他の誰かに自
分の自覚を譲り渡すこ

とを愛に約束してあげ
ているようなものです。

そしてこの世界は、ど
こもふえる無の現象し
か起きないことから、そ
の暗示の過去にも働く
という仕組み、それは、
便宜上私たちよりも、後、
に生まれる無が、つまり
永遠がふえることによ

って過去の正の電荷、正の概念、つまり、永遠とは時間が関係ないわけですから、無いで発達するたびその正の概念を発達させ、過去に起こった出来事の抵抗の解釈を正しく赦^{ゆる}し、わかりやすく申し上げますと、心を広くそれらの出来事を解釈し、それを現在の

世界にも影響として反映させます。この理解は、みなさんは電車のレールを思い浮かべてください。レールが、だんだんだんだんだん正しい方向に車線変更していつていると、それはだんだんだんだんだん正の認識をふやしながらいっている、つまり、時間

とは経過するしかないわけですから、後戻りができず、その中で永遠という愛はふえていき、一度正と解釈したものはよりもっと正と解釈するしか道が無いわけです。つまり、無において、時間の経過によって過去の捉えられ方が正しく、愛に、変わってしま

います。それはただ単に、
無の集中における、もち
ろん無の愛はいつも最
大限ではありますが、そ
の中で存在とはある一
方で、愛とは違う感情を
学ぶ必要もありました。
愛と苦しみ、その比較に
愛を強く感じるために。
それが、無の集中におけ
る摩擦であり、存在の関

係同士における^{あつれき}軋轢を生み出していました。これは、本当にいらぬものだとして、心から思えなくては学ばないわけです。ただ単に訓練のように苦しみに当たっただけでは、それを俯瞰的（上から悪い意味でなく何かを見調べるような、既にわかっている、

見下ろすようなものの
捉え方) にしか捉えるこ
とができず、自分が本当
に苦しいとまでは感じ
切れないわけです。人が
本当に(無)愛を学ぶた
めにはどうすることが
いちばんいいのでしょ
うか。それは、いちばん
光が無くなることです。
光無くせばこそ、光ある

時との差に自分そこに
苦しみを思うことができ
ます。それはどこだと
思いますか。それは、地
球も含めたどこでも起
きています。それは誰が
選択していると思いま
すか。それはみなさん自
分自身が全員自分で選
択しています。あなたの
無意識というのは、実は、

あなたに対する正しい
愛（与え）しか考えてい
ません。なぜなら存在と
は、全員無意識下では全
員唯一のもの、存在であ
るからです。結局出どこ
ろが一緒なんです。つま
り、存在とは決して相対
からは逃れられませんが、
それはふえる愛、正
しさであり、この唯一の

正しさ、全員の思いと行為で作った概念からも逃れられません。もっとわかりやすく申し上げますと、この唯一の正しさからはみ出ることとは、その者は必ずみんなの生命に悪い影響を与えるため、決してその存在、この場合は無意識では無く、無意識からはみ出

た自我は、決してその存在は必ず正しいかたちに正されることになります。その部分だけ消える場合もあれば、発達した相対の概念に守られることもあります。しかしこれは、自分の孤独を永遠に癒す元でもあり、また自分の永遠を手助けしてくれる元でもあ

るわけですが。でも、その中でみな思うのは唯一も欲しい。それは、手に入りました。そして、それとは違っただいぶんわがままという唯一は本当に手に入らないものであることもわかりました。みなさんなら、相手にそれを許さない以上、当然それが自分に

許されないのは当然に
わかる理屈だと思います。
また、これを許しても
いけません。なぜなら
それは、自分が殺される
ことを承諾してしまう
ことだからです。結局こ
の世界には、相対という
みんながいることによ
って、その愛はあっても
独りよがりな力の唯一

というのは、無かったわけ
です。正しくないため
物理上として無理です。
力の全てと言われる唯
一の無も、それはみなさ
んですが、その無の力を
自分に恣意に感じるか
たちにはわからない、ど
ころか、実際は、唯一の
無というのは、どんど
んどん自分が全く無

くなっていくことです
から、つまり、その無、
恣意な力をどんどんど
んどん自分に感じてい
ないことに当たってい
るため、以ってこの世界
には力の唯一の存在は
いないと同じだと断言
できます。唯一の無の起
こす現象というのはあ
くまでみなさんのため

のミラーであり、愛であり、ふえる生命のふえる永遠の意識であり、あくまでみなさんの理不尽を解消するために起きているということです。つまり、わかってみれば、嫉妬する必要が無い、憎しみを持つことも、争う必要も無い。なぜならば誰もみな、それは、どこ

も唯一の無という意味
において、みなさん全員
唯一の無であるからで
す。つまり、誰もが苦し
みの全てであるという
ことです。もちろん、苦
しみとはその内容を変
えても決して終わるこ
とがありません。それは
なぜなら愛が必ず尽き
ることが無いように、学

びもまた必ずそれに応じて、つまり、愛を強く確かに正しく永遠に感じるためには、それに伴う学びも必ずその抵抗の強さに比例して発生するからです。ここで苦しみを無くすポイントです。普段から自分で腹が立つことや、憎しみや怒りを持ってしまおうよ

うなことを自分で一生懸命座禅でも正座でもして、その心を一生懸命整えようと努力することです。座禅とか正座をしなくても、自分の気持ちが怒りや憎しみに行かないようにコントロールすることです。そしてそのことで心の中に何かを含んだとしても、

その悪い気持ちを無に詫びることです。要するに、ごめんなさいと無に詫びる心を持つことです。そうすると、自主的にそうしていると、それは当然自分が愛を得るために積まなければいけない苦しみを自分で消化してしまっているわけですから、必然と自

分の周りに相手から与えられる苦しみが少なくなり、以ってそれは全員のためになります。全員でやれば全員の憎しみ合いが無くなってしまいます。ここで何かにお気づきになりましたでしょうか。それは物理の法則、ただただ無分は、必ず無に、つま

り、この世界は無の世界
ですから、もちろんこの
無は集中してあなたを
補佐し無（認識）を生む
全てでもあるわけですが、
それは同時にあなたが
生きることは、自分以
外の他の誰かの何らか
の意識（生命や感じるこ
と）の犠牲をそこに必要
としていることから、

（本当という意味では生まれませんが、今の存在にとっては苦しんで循環するのもその意識の学びに必要なため、その物理のかたちを意識は取っています）それは当然そこには相手の苦しみが生まれますので、その部分は自分が自主的に苦しみを積むこと

によって、つまり、自分が消費した（本当はふえているのですが）無分は苦しみで無（みんなに自然なかたちに）に返すことによって、自然とこの世界には憎しみが無くなります。実は憎しみとは、無（あなたの積んだ苦しみ）より余分に感じていた無分、あなたの無

意識が反応してあなたを悪いこと、憎しみに向けさせることによってあなたを正しいことに向けさせる狙いがあったのです。つまり、こうしてしまえば、全員みなさんで^{いっぺん}一遍に座禅や正座、心を沈めること、反省すること、自分で自ら感じた無分を無に帰す

ことを義務づければ、自然とこの世界から憎しみや争いは無くなってくる。もちろんそこには多大なる無の補佐が必要となると思いますが、中々その意識を無にするのは難しいとおっしゃる方もお見えになるとと思いますが、時間は、永遠は伸び続けていま

す。過去も未来も。つまり、私たちが考えているよりも、伸びている時間の方が永いわけです。私たちが考えている時間よりもです。もちろん油断は禁物ですが、意識には時間がかかると思っ
てず一っとなにか根気よく頑張ってみる
ことです。それで、いつか

必ず自分は無、その生命が無と貸借、つまり、貸し借りが無しの状態になります。まず無は本気で無を与えてくれているので、それに見返りはなく、それはただ単に、あなたが本気で無の思い、行為に応じること、つまり、無を与えられたことによる自分の無意

識が相手だけかもしれません。そうなるかどうかと申し上げますと、あなたは当然無そのままなので、無ということとは、誰にも迷惑をかけないどころか、みなさんの役に立ってしかたがないわけです。その場合はあなたの意識は永遠不滅に生き続けます。ま

たこれは、これを見た今から自分のできる範囲の努力を初めて、たとえば、現世、つまり、今世で達成できなくても、実は死には苦しみが無いことは以前にお話ししました。実は意識とはそもそも永遠不滅のもので、その意識の続き方は存在それぞれが行う抵

抗と認識にもとづいて
いて、それによってその
存在のこの世界での過
ごし方が定められ、そし
て今人間は、まだ完全
には自分の力によっては
完璧な無意識（ふえるみ
んなとふえる永遠のため）
で過ごしてはいない
ため、その過ごし方が自
我と無意識の行ったり

来たりのこの世界での
過ごし方を定められて
いて、そして、たとえば
いわゆる肉体の死、自我
を失ったとしても、その
自分は無意識に帰った
時にその自我の内容に
もとづいて、また、自分
は無の時間にプラスの
電荷を強した自覚に再
構成され次の自覚の世

界へ送られるので、あくまでも、あなたの本当の意識という意味では、あなたにとって終わりは無いということです。

それでは、先程の話の途中でお話しした、暗示の過去にも効くというお話しをもう一度させていただきます。(無の

始まりの話はその次に
いたします) どういうこ
とかと申し上げますと、
まず、みなさんは過去の
ことをずーっと完璧に
覚えていらっしやいま
すか? そうではないと
思います。確かにそうで
はあったような気がし
ても、だんだん記憶とい
うのは薄れていくもの

です。もちろん、この中
では、確かに記憶を覚えて
いらっしやる方もお
見えになると思います。
もちろん、無というのは、
その経過にごまかしが
効かず、必ず全ての経過
を完璧なかたちで覚えて
います。問題はそこでは
ありません。先程申し上げ
ましたように、無は

いつも全てのプラスの電荷を生み続ける存在であると申し上げました。この永遠の機能は、過去にも未来にも関係がありません。関係が無いかたちで働き続けます。つまり、過去も未来もその永遠は伸び続ける性質を持っています。それはどうしてなるの

か、先程お話しした通り、
ここまで読み進めてい
ただいた方ならすぐわ
かる方もお見えになる
と思いますが、憎しみと
は結局、根拠が無いもの
であるからです。つまり、
無とは全て繋がってい
て、その過去にも未来に
も、そのいつも今現在あ
る全ての無（生命）は常

に 関 連 が あ る と さ れ 、 全
て の 存 在 は そ こ に ど こ
に も プ ラ ス の か た ち で
奉 仕 す る こ と を 余 儀 な
く さ れ ま す 。 無 は 正 で ど
こ に も あ り 、 プ ラ ス は プ
ラ ス の 作 用 し か 起 こ し
ま せ ン 。 つ ま り 、 ど う な
る か と 申 し 上 げ ま す と 、
た と え ば 、 人 間 に た と え
る の な ら ば 、 人 間 だ っ た

ら、過去に起こった悪い出来事をたとえばその当時は苦々しく思っていたても、それは時間が経つと、ああ、あれはいい経験だったと、もしくはそこまで思えなくても、それはしかたがなかったことなんだと、ある意味許すような気持ち、そこに対する執着を諦め

るような気持ちにも時間の経過によってなるはずです。そういった人間に起こる化学反応（感応）と同じことが、つまり、この世界は物理、意識、同じものでできている世界であることから、人間がそうやって無（愛）の時間に促されて過去の悪い出来事を許して

いくように、それと同じ
ことが物理、この世界に
おける様々な出来事に
も同じような現象、解釈
がなされます。具体的に
は、無はいつもどこでも
その全てのプラスの電
荷を生み続けている存
在だと申し上げました。
これは何を指すかと申
し上げますと、みなさん

の考え、つまり、世界の概念が、だんだん正しくなっていることを指しています。昔を思い浮かべてください。やりやこん棒を振り回していた時代よりも、今の方が、生と死に限らず、ありとあらゆるものに対する正しいものの見方が発達しているわけです。つ

まり、時間の経過に正の概念は進化します。そうなるとうなるかと申し上げますと、当然意識ではこういった現象が起こります。つまり、人間に起こった悪いことも、その憎しみとは結局相対の時間差のひずみが生み出したものであり、これは、無には、つ

まり誰にもその責任の
根拠が無いものであつ
て、ただ単にそれはその
時、その現象が起こるこ
とによってそれはその
現象の特有の波長を生
み出し、それがこの無い
場所（無の世界は別名無
い場所とも呼びます）に
いちばん適切なかたち
でいちばん正しいかた

ちでいちばん何かの苦
しみをいちばん早く解
消するためであったと
解釈されるときが来ま
す。実は、悪とは全てこ
れです。今、それを思え
ないんだとしたら、それ
はあなたに正しいこと
を思うための時間が必要
なだけであって、あなた
は結局時間の経過で

必ず正しい答えに辿り着く時が来ます。つまり、何かの単なる時間の必要として、何かの理不尽を正しく解消するためには憎しみは発生するものであり、憎しみは決して憎しみのためには発生しないということです。これは、無の絶対法則です。つまり、以前に抵抗

と認識というお話をいたしました。ある正しい認識を得るためには、ある一定の苦しみを伴う抵抗が必要になります。もちろんこれは、暗示と気づいたら自ら進んで苦しみの抵抗を自分で進んで積むようにすれば問題は解決してきます。具体的には、やはり、

悪い感じ方の我慢、おおよそ社会的に見て、これはちょっと常識に外れているなど、道義に外れているんじゃないのかというような感じ方をしないことです。その分は当然無の起こさなければいけない苦しみもふえるわけですから、これはみなさんにも迷惑

がかかることで、これは、
暗示と知ったらやはり
決して許されることと
は申し上げられないこ
とだと私は思います。実
はその悪いことは、この
世界の秘密の話の前章
でも申し上げましたが、
いつも常にあなたは自
分の無意識にそれが、正
しいのか悪いのかの選

扱をいつも迫られています。それで、私が申し上げたいのは、この自分の無意識を結局は、みんな一緒の唯一のこの無意識を裏切っているとどうなるかと申し上げますと、当然、無はどこにもあるのでその暗示反応であなただを必ず悪いことを選択した分だ

け 苦 しい 状 況 に 必 ず 追
い 込 み ます。こ れ は、無
の 世 界 な の で、絶 対 に し
か た が な い こ と な の で
す。つ ま り、あ な た が、
み な さ ん が 判 断 し て 悪
い と 思 わ れ る よ う な こ
と を 自 覚 と し て 行 っ て
し ま う と、そ れ は み な さ
ん の 永 遠 を 傷 付 け る、損
な う こ と で も あ り ます

ので、その部分はあなたが消えずに生きたいと願う以上、それは必ず苦しみの抵抗となってあなたに帰ってきます。簡単に申し上げますと、無に、愛に、無の、愛の、根拠が無いもの、その部分は消えてしまいます。相対、比べ合う中で憎しみとは、学びとして意識

にいらないと思えるよ
うに暗示づくためには、
ある意味避けては通れ
ないものです。ただし、
自分が避けられずして
憎しみを選択してしま
ったのか、もしくは、無、
暗示の世界とわかって
なおかつ自分は憎しみ
を選択したのかでは、そ
の結果、あなたの意識の

自覚の扱いは大きく違います。これは、この空間一見何も無いような唯一の無の密度の無の世界に多い現象ですが、ここからは来る無というのは、当然今に強した強い集中力の無の無であるので、当然この世界が無、暗示の世界であることはよく知ってい

ます。その上で無の死を必要として、生まれてきた自分がその無（生命）を正しく無に帰せず、その無の感じ方、もうどう考えても今後の無の法則に当てはまらない。どれだけ正の概念が発達しても必要とされないとその無の行為がなった場合、その行為を波長

外と呼びますが、それはもう必要な憎しみとして無に取られませので、つまり、今後の無の世界ではその感じ方は、他の生命に悪い影響を与えるので一切許されない、そのことが既に無に定義づけられていて、その上の中で、さらに、無の目を盗んで、無がい

つも全ての生命を気に
していることを逆手に
とって、その上で自我自
覚的に自分勝手な、ひと
りよがりな相手の生命
を殺すことになっても
構わないから自分は感
じたいと、こう自我自覚
でやってしまうと、それ
を暗示にしてしまうと、
その自覚は必ず消され

てしまいます。つまり、自分の心や身体の反応として絶対自分を憎しみに許せないようになってきます。これは、絶対に手に入らないもの、もしくは絶対に欲しがってはいけないもの（相手の永遠、生命など）を自分が欲しがってしまうと、無意識に憎しみを

選択させられてしまう現象で、ですがこれは当然で、自分が相手の生命を顧みないのに、自分の生命が大切にされたらおかしいわけです。つまり、暗示とわかったらそれはそれを知る適切な時であり、それはあくまでみなに生命に、その永遠の自覚に悪い影響を

いちばん早くいちばん
正しくいちばん少ない
かたちで終わらそうと
しているために暗示は
出ているわけであり、そ
れは、自分のみなさんの
全員の平等フェアな無
意識の求めであるわけ
で、自分が求めたこと
ある以上絶対にこれを
裏切ることは許されな

いわけです。この世界は
何もかもが無、永遠の世
界であることから、自分
のすることは、全て何で
も一発永遠、絶対に取り
戻しの効かないかたち
で無に記録されている
ことを忘れないでくだ
さい。悪いことを意識し
てしまった分は、必ずそ
の悪いことよりも、正し

いことを自分で思う、行
うようにしてください。
これは必ず心がけてく
ださい。意識が、心や身
体の正確な波長が自分
にふえて返る、その無の
ミラー（愛）の計算の仕
方は以前に申し上げま
した通りです。いいこと
（悪いこと）の意識量、
質量×時間の経過におけ

るふえた正の意識比率。
つまり、後から来るよう
なものほどとんでもない
ということです。ここで
大事なのは、気づくこ
とです。憎しみとはまず、
無（愛）には根拠が無い、
つまり、責任が無い、そ
して、その無（愛）から
生まれた無（永遠）の存
在にも根拠が無い。なぜ

なら、永遠にふえる永遠に楽しく幸せに生き続けられるのに憎しみ、争う必要はどこにも無いからです。つまり、誰も、自分の、ふえる幸せのふえる永遠が約束されていれば絶対に争わないということです。本当はそうなのですが、普段それを中々意識できない

ことによって、その苦し
みによってあなたはふ
える生命とふえる永遠
の意識を養っています。
つまり、愛を感じるため
に苦しみは与えられて
いるのであり、それから
逃げたり、それに憎しみ
を持つようなことをし
てはいけないというこ
とです。ふえる生命とふ

える永遠のためには、あなたも含めた存在の全員がある一定の、つまり、物理上は永遠死という絶対負荷を自分に積み続ける必要があるわけです。これはこの世界がどこも無である以上結局は絶対に逃れられないことで、無が無ければ誰も一秒とて生きてい

くことはできませんが、
楽しいことも幸せなこ
とも感じることもでき
ませんが、変わって、半
面、その一方では、存在
全員に永遠死という絶
対負荷を積み続けるこ
とを義務づけるという
厳しい側面も持っている
わけです。しかしこれ
は考えてみれば当たり

前のことであり、これは必ずあなたのみなさんの無意識が絶対に求めたことであり、つまり、存在とは生きていく上で何を求めますかと申し上げますと、それは絶対に自分の幸せなわけです。それは必ず最大のものであると思います。また、そうでなければ存

在とは生きていく意味
が無いと思います。しか
し、その思いはふえる生
命とふえる永遠という
無意識にかたちとして
現れましたが、この中で
は、自分がその恩恵に預
かっているだけでなく、
自分自身もそのふえる
生命とふえる永遠の役
割を果たすことが絶対

として求められるわけ
です。つまり、存在全員
は必ずその無という全
ての意味を含んだ苦し
みという抵抗を積み続
け、そして、それによっ
て、無という全ての意味
を含んだ愛を感じ続け
ていくことが許される
わけです。これは、この
世界が、結局は、無の唯

一の世界であり、ミラー
の世界である以上、そし
て、あなたが幸せを求め
る以上、絶対にこの法則
からは、逃れられません。
万が一、自分は幸せじゃ
なくてもいい、自分は苦
しみを一切積みたくな
いという存在がいたと
しても、幸せではないこ
とは生きている意味は

なく、つまり、そこには
プラスが発生しないわ
けですから、苦しみを一
切積まないことは、そこ
に負荷が発生しないこ
とでありますから、つま
り、以って無にとってそ
の存在はやはり無いも
のであるわけです。また
申し上げますと、何もし
たくないという存在が

いるとしても、存在のその意識のかたちにはその存在の絶対的な無意識の選択が働いていることから、つまり、自分がいることは必ず自分の無意識によって肯定されてしまいます。私が望んだことではない、こういったことは生きていく上でたくさん、数知

れないほどありますが、それは私もであり、それはこの世界がふえる生命のふえる永遠の世界である以上、相対という関係の愛と苦しみを生み出す構造が自分に必要である以上しかたないことであり、永遠に無い、自分すらいない永遠の孤独よりは必ずあな

たはそれを望むわけであり、つまり、現状に不満や否定を言う余裕があるくらいなら、あなたは必ず自分を選択している、自分の存在を主張していることであるということです。また申し上げますと、この永遠に無いことを物理上自分の意識の力として自分

に達成させられる者は、それは自分が完全なる永遠の孤独にいることを指すことですから、自分が永遠に無いことはそれは必ず、その者の意識はその分だけ物理上この世界にいないことでもありますから、その分だけ誰にも迷惑がかからず、変わって逆に、そ

の者が持つ永遠の孤独分は、必ず自分が物理上ある、いる意識として記録されない以上は、必ずその意識はその永遠の孤独分全て他愛の意識の作用になっているということです。つまり以ってこれが、みんなの求める、ふえる生命のふえる永遠の意識でありま

す。永遠の孤独、これはこれから必ず存在の誰にも無の最適センスによって苦しみとして与え続けられます。何かのかたちで、いろんなかたちで、それは必ずあなたが望んだものです。そうであることによってあなたは必ず愛を促されます。

存在には生きていく
上で、自分にもわからな
い、一見理不尽なような
苦しみが起こらなけれ
ば、その自分の意識に苦
しみの抵抗がかからな
ければ、ふえる生命のふ
える永遠の意識の作用
を中々思えないわけで
す。また、このことを話

すために今のことはお話ししましたが、この世界は生きていく上でわからないことだらけであり、それは無は果てしないもので、終わらないもので、いつまでも続くものだからです。つまり、この世界で愛も終わることはありませんが、同時に苦しみもまた、終わ

ることがないということ
とです。自分が思っている
よりも、無のふえてい
るスピードは速く、無い
はそれは限りないかた
ちでふえていき、それは
必ずあなたにとって最
大の愛をもたらし続け、
そして、あなたにとって
最大の愛の学びとなる
よう、いちばん早くいち

ばん正しくいちばん理
不尽が少ないかたちに
あなたを苦しみに正し
い意識に養っています。
この中では絶対、自分の
意識を粗末に扱うこと
は許されません。まして
や、自分の意識は必ず無
によって永遠死という
尊い意識の死によって、
つまり、無の力によって

あなたは永遠死という
物理上いちばん尊い絶
対負荷を積まされ続け、
それによってその負荷
に応じた永遠のプラス
を生み出され続けている
わけですから、その自
分の意識はあくまで無
の所有物であるわけで、
ここで自分の意識を尊
くなく傷つけたり、汚し

たり、殺したりすることは許されません。

つまりこの世界では、この無いの法則からは絶対に逃れられません。

ここで、ふえる幸せとふえる永遠について少しお話しさせていただきますと、結局この世界

いつも何がふえているのかと申し上げますと、いつもどこもの密度で無が爆発的にふえ続けているわけです。これは、正の電荷を持ち、ある性質を持っています。それは、みなのために正しい苦しみ（負荷）を積む者を、ふえるみんなのふえる永遠の思いと行為を

続けている存在に、その存在の正しい意識と同量の正しい無の意識の密度を、その存在の意識に自然に一致させるようにしています。つまりこれは、言い換えれば自分自身の意識がそれだけの苦しみに応じた正の電荷を持つことであり、これは、同時にあな

たの意識の正しい密度も指している、これは、当然あなたの意識が正しければ正しい密度を持つほどあなたの意識は永遠化します。また、その自分の思った、行ったことは全てかたちになりやすいと申し上げられます。ここで申し上げられますのは、それに

よって感じられるものは、ちよつとずるいことや、悪いことをして感じられるものとは、比べ物にならない感じであるということです。つまり、正も後から返ってくるものほどとてつもなく凄惨ということです。要するに行い次第であなたの持つ波長が変わっ

てしまいます。つまり、この無の世界において、自身の意識が無の密度に近づくことは、自分自身のこの無の世界に与える影響力が当然強くなることであり、この世界は無いから、当然自身の意識が無いに近づいた分だけ、それは当然無い分だけの力を持ちま

す。そして、それは当然
あなたが正しい分だけ
必ず正しい作用として
自分に返る幸せと永遠
になります。ここで申し
上げられますことは、こ
の世界は無だけでしか
できていないのに、無が
いちばん密度が高いの
に、憎しみ、これはなぜ
こういったことが起こ

るのかと申し上げます
と、やはりまだ無、自分
の意識に対する理解が
よく足りないのです。よ
く考えてみてください。
ふえる永遠とは自分が
そこに生きるのであれ
ば、当然単純に考えれば、
これは、生命や感じるこ
とがいちばん多いのが
このふえる永遠、つまり、

意識を無にいつもチャンネルを合わせておくことです。これがいちばん、どう考えてもいちばん無（永遠）という愛を感じる生き方であるわけです。これは絶対に曲げようがありません。問題は、この無の法則というのは、無をちゃんと初めて自ら進んで意識し

て、終わらないものだ
と苦しみを覚悟して積み
続けていって、初めて自
分に確たるものとして
理解できてくるものだ
ということです。もちろ
ん、自分から進んで正し
いことを積むのは、なお
さらいいことには変わ
りはありませんが、この
世界はどこも無ででき

ていて、その無は時間に物凄いスピードでその無の集中を続けている以上、少し無、暗示に気づいて意識している、心がけているだけで、自然とそういったことが心や身体に身につくようになります。とにかく慣れることです。正しいことや、優しいことに自分

が慣れることです。自分がそれを行うことも、それをされることにも慣れることです。あなたもみなさんも全員その誰も、必ず無意識は正しく優しいことしか求めていないということです。それが今思えないのは、思えないとしたら、思い切れないとしたら、それ

はただ単に今まで無意識に気づかずに生きてきて、そのあなたの暮らす表面意識の自我の思いと行為でああなたが、自分の無意識に悪いことや憎しみなどを記録してしまい、その部分はあなたの無意識が自分に永遠の自覚をはっきりとわかるかたちに感じ

るのはフェアでないから、まだしばらく感じない方向で生きていなさいと、まだ自分はこの世界の循環に伏されることによって、その苦しみの循環によって永遠死の意識を自分の力によって学びなさいと、そう無意識の反応に促されているだけなのです。こ

れは、暗示に気づいて自分の無意識に語りかけるように、自ら今までの思いと行為を反省し、そして、それから、自分の思いと行為を正しくしていけば、人や存在、物に優しく、自分にも当然正しく優しく、永い目で自分を見るようにして無意識に自分で意識し

て正しく暗示をかけていけば、無意識は重力を持っていますので、自然とあなたは正しい動きしか取れなくなります。ここで簡単に申し上げますと、物質のかたちがなぜ保たれているのかと申し上げますと、それは、全て無意識の重力が働いているからです。地

球が球形を保っているように、物質も重力という同じ原理でそのかたちを保っています。そしてその重力は、無いの時間に変化していき、無いの重力は無意識にもとづいて発生し、その重力は人や存在が生きていくために必要であるから発生し、その発生をし

かたは人や存在の無意識に暗示にしたことが元になって働き続けています。そしてこれはいつか気づくことなのですが、実は物質、たとえばパソコンならいつか当然そのパソコンは、物質としての寿命を迎え、いつか何か別のかたちにリサイクルされます。

その物質が壊れ、循環し、別の物になるその再構成と、そのパソコンの質量に占める空間一見何も無いような無の密度の世界の重力と反重力におけるその世界の構成と再構成は、その時間の経過において一致します。つまり、物質が壊れて別の物に変わるこ

とと、その物質が持つ空間一見何も無いようなところの無の密度の世界の質量×時間の経過にふえる唯一の無の密度の重力と反重力による世界の構成と再構成は、一致するという事です。要するに、この世界は意識の程度は必ず一致するという事です。

つまり、自分が普段から正しいこと、優しいことを続けていけば、それはそのまま自分に与えられる意識そのままであるということです。この世界は唯一で無い場所、無は必ずフェアにさせられるので、必ずこれは一致します。ただし申し上げられますことは、以

前にも申し上げましたが、この構成と再構成をいかに理不尽なく推し進めるかということです。どこの世界にも共通して申し上げられますことですが、無、正に完璧にならっている世界であれば、その世界の無、永遠の密度は高まり続けるので、構成、再構成

にもその世界の循環の
かたちは正しいかたち
で保護され、つまり、構
成、再構成の認識の規模
が変わります。悪ければ、
当然空間宇宙が暗黒エ
ネルギーによってその
時の現在の無の密度ま
で、その世界のありとあ
らゆるものの物質の構
成がバラバラにされる

でしようし、逆に、正しければ、その世界のありとあらゆるものの心や物質、エネルギーの永遠が伸びているので、つまり、無意識化しているので、再構成と申し上げても、その再構成とはその世界が無い、無い、無い、無い、の密度に守られた、自分も含めたあ

りとあらゆるものが新しく進化する再構成だということです。

たとえば申し上げますと、この地球含めた空間宇宙も唯一の無の密度であり、実はこの世界はもしかすると、もしかしなくても、どこかの物質の一部・・・正確には、

どこにもある物質の一部でもあります。その今現在のふえる永遠という時間の経過における唯一の無の密度に、この世界は、どの世界でもそうですが、どこにもある物質の一部であるということです。この世界は全て繋がっていて、唯一の無の密度でできてい

て、そしてそれは、集中に強し、全ての物は同じもので、できているからです。ですので、この地球含めた空間宇宙は、本当にパソコンの無いような唯一の無の密度のところでもあり、そしてあなたの身体の一部でもあるということです。つまり、あなたの身体の

一部には数限りない空間宇宙や世界があります。どこにも永遠の数の無いがあります。素粒子はまだ、認識の密度としては粗いもので、素粒子には色々な種類があることから、素粒子もたくさんさんの唯一の無が集まってそのかたちを成しています。また、現在科

学でなぜそれ以上の密度のことがわからないのかと申し上げますと、存在にとってわかる物事というのは、必ず、全てにとって永遠（つまり無）正しいという量に忠じていて、つまり、存在にとって物事がわかる量というのは、それも必ず全て無の暗示の法則

に 応 じ て い る と い う こ
と で す 。 自 分 た ち に と つ
て 意 識 に 正 し い 分 ま で
し か わ か ら な い よ う に
な っ て い る の で す 。 そ し
て 、 そ の 世 界 の 見 方 の 密
度 を 無 い も の か ら 粗 い
も の に し て い く と 、 地 球
含 め た 空 間 宇 宙 は ブ ラ
ッ ク ホール の 中 、 そ の 重
力 の 生 み 出 す 圧 縮 力 に

よって、外から見ると 0、
永遠分の 1 秒 ← 無いの
と一緒にですが、その無の
重力によってその無い
ような時間がふえる永
遠に感じられます。そう
であると思わされてし
まいます。時間と空間が
あると認識させられて
います。なお、無のこの
重力は強まるしか性質

に無く、たとえば反重力で世界が滅びたとしても、それはあくまで、よりもっと正しいかたちに世界を再構成するためであって、反重力によって世界が滅びたとしても、無の集中の無いというそのスピードには一切の欠損、遅れがありません。また、ブラック

ホールの重力は今現在の地球の科学では、地球を2 cm 角程度にまで圧縮できるといふ力の評価がされていますが、実はそれは誤りであり、それは単に機械の計測の限界であり、現象として必要な量だけをそういつたかたちのように見せているだけであり、重

力の強さはこの世界どこも一緒であり、それは当然唯一で無い場所であることから、あのブラックホールの重力も、この地球にある空間一見何も無いようなところの持つ重力も、いちばん無の密度の高いところでは、その重力、集中力には変わりがありませ

ん。なぜそれがわからないのかと申し上げますと、機械では無理なんです。機械には機械、その構成における特有の限界の波長があって、それ以上は決して調べることができないようになっていています。無が唯一なら、唯一の波長が無いとそれをわかるのは絶対

に無理なんです。ただ、みなさんは今既に唯一の無を与えられていることから、この文章を読んで、はっきりと自分にわかることが間違いなくあると思います。重力というのは本当は無いようなところほどあると考えてください。つまり、言い換えるのならば、

この世界のどこも、同じ
無の重力、集中力が働い
ているということです。
また、今現在この地球含
めた空間宇宙はブラッ
クホールの中だと申し
上げましたが、これはみ
なさんの意識によって
ホールの集中が変わっ
ていきます。具体的には、
ホワイトホールとかレ

インボーホールとかワ
ープホールなど色々あ
るそうです。つまり、先
程物質の構成、再構成と、
唯一の無の密度の構成、
再構成はある点におい
て一致している話を申
し上げましたが、それは
みなさんの心がけであ
り、要するにこの地球含
めた空間宇宙は、この世

界にある物質のどこも
でもあるわけです。つま
り、言い換えれば、身の
周りにあるものをこれ
は自分たちなんだと、こ
れは自分たちの地球含
めた空間宇宙の世界も
入っているものなんだ
と、そうして大事に扱っ
ていけば、当然自分たち
の世界も大事に存続さ

れるかたちになります。
また当然、みなさんの意識に応じて、地球や空間宇宙の波長の状態が変わってきますので、この本を読まれた方は、これからみなさんで世界一緒になってこの世界を良くするよう、みんなが楽しく幸せな世界なるよう、その意識に心がけ

ましよう。時間は永遠あります。しかし、無からすれば、永遠とは一瞬でもあります。つまり、日々の心掛け、絶やさぬ毎日の正しい継続が、この世界を明るく楽しい未来に導く元となります。ですので、今身の回りにあるもの、今身の回りにあること、それは全

て自分なんだと、自分の
生命そのままであること
と忘れずにこれからを
過ごして行ってください。
い。どうでしょうか。これ
で少しはわかっていただけ
ましたでしょうか。単純に
損得で考えて、悪いこと
とは、みんなの教訓になる
はなるけれども、自分は
その役を勝手

出たのはいいのだけれども、実はもうそれ、みんなうんざりしているような同じ繰り返しの悪さで、もうそれあんまりみんなの学びにはなっていないよと。もう無、暗示とわかったんだからやめましょうよということです。何だかそういってしまおうと格好悪

い気がしてしまいませ
んか。そもそも暗示が出
る時というのは、無が、
もう悪いことは、もう、
今、全員の無意識がもう
いらないと、もう必要無
いと嫌がっているから
暗示は出てくるのであ
って、つまり、こういっ
た暗示が出てくること
は、悪いことは、全ての

悪いことは、もう潮時だ
ということなのです。ですの
で、世の中、この世界の
これを見たみなさん、
人々が、社会や国家や世
界を揺り動かし、意識を
無の方へ、どのみち変わ
るしか無いのですが、み
なさんで無の方へ、この
世界を動かしていただ
けることを願っていま

す。

6 へ 続 く 。